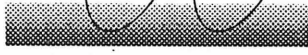


想眼鏡



「もっとう早んでみるとよ」の一九八四年にパリのボンビドー・センターで行われた回顧展につづく充実した展覧会だが、図録に収められた画家の言葉を讀んでゆくと、構想がおのずと熟するのを待ち、仕事の表現を、経過する時間のなかに委(ゆだね)る画家の姿が浮かび上がってくる。

■画面からはみ出たもの

ボナール独特の絵肌の秘密が

そこにある。それは比喩(ひゆ)ではなく、まことに時間が降り積もって出来た画面なのだ。粉雪のように色彩がカンヴァスをゆっくりと覆ってゆく。その薄化粧のあわいに、描かれた光景が、地表の凹凸のように、透かし彫りで浮かび上がる。「自然を観察する、そして色調を指示しながら画布を探る、すると平らな面が作品の雰囲気と覆われてくる」。色彩を混ぜせず、薄塗りと筆遣で、絵の具を何層にもキャンヴァスに撫(な)でつけてゆく。すると画面には、距離を測定することが不可能な厚

ボナール 時間の堆積

国際日本文化研究センター助教

稲賀 繁美



「私の絵がひび割れせずにずっと残ってくればいいのだが。紀元千年の若い画家たちの前に蝶(ちょう)の羽で舞いおりたいものだ」。それが実現するのも、あとわずかだ。

みと、とらえどいものない立体感が宿ってゆく。そのなかで色彩の層の透き間からいつれず、光が発し始める。

だがそれは、すべてを自然のり方とは、ひとつの大きな真実堆積(たいせき)に任せることではない。「自然には終わりがなく、作品には終わりがある」のだから。空間を断ち切る画面構成にあっては、見えるものはっきりと切り取ってしまふこととは、ほとんどの場合、なにかもってへると、「青が灰色にな

自らを題材に私たちに與わぬを仕掛けてくる」。その裏をかきの本当の画家の仕事というわけだ。「絵画にふさわしいや

り方とは、ひとつの大きな真実堆積(たいせき)に任せることのために、たぐさんの小さな嘘(うそ)を重ねること」だ。とりわけ色調は環境次第。「南仏の太陽の下では、何もかも輝いて、絵がきらきら弾んでいる」が、そのタプローをパリに

するには、年季が要る。「プロの仕事には、自分の経験を有効に使う必要」があり、そこに「年を取るこの唯一のメリッ

ト」もあるのだと、晩年の画家はいう。作品の実現には、制作に費やされた時間の蓄積に加えて、画家その人の年輪が加算される。「華せだと言いつきは、もう華せではないものだ」という述懐。それは、絵画作品がその内部に集約して湛(た)える時間の厚みがおのずと帯びるもの悲しさを感じ、画家の人生観でもあるだろう。

■年を取るメリット

いなが・しげみ氏 一九五七年東京生まれ。パリ第七大学博士課程、東京大学大学院博士課程修了。三重大学助教授を経て九七年から現職。専攻は仏文学、美術史。比較文化、書著に「語と色」(絵画の黄昏)など。